

福大生ステップアッププログラム

第3回、作ろう花と緑と心のキャンパス - 自然キャンパスマップをつくりましょう -

開催日時：平成19年9月22日（土）、13:00～16:00

参加人数：13名

テーマ：「水辺と緑のつながり」

講師：株式会社エコプランニング 土谷 光憲 氏

講座：「学内の緑と記念植樹の現状」 - キャンパス樹木調査の結果より -

野外：学内並木と水辺の散策

講演内容：

1. 学内の緑は自然林が少なく殆どが園芸種
2. 照葉樹林と二次林（雑木林）
3. 緑のつながり
4. 水辺のつながりを再生
5. ヒートアイランド化を緩和する緑と風の道を創ろう

講演詳細：

1. 学内の緑は自然林が少なく殆どが園芸種

2006年7月より約半年間、学内の樹木、草本類を中心とした植生調査を行った。その結果、学内には樹木類が76種類（園芸品種含む）、草本類は6種類確認された。また、存在する緑の多くが園芸種で占められていることがわかった。園芸種は、施肥などの手入れが必要であり、本来そこにあるべき緑ではない。学内に自然林に近い緑を回復させる事は大変意義のあることである。

また、学内を調査していて驚いたことに「ツクシオオガヤツリ」という、希少種が鳥帽子池に生育していることを確認した。これは絶滅危惧IB種に含まれる非常に珍しい種であるが、それが何らかの理由でこの池に生息していた。この植物は、海外ではインド、インドシナ、マレーシア等で確認されているが、国内では福岡平野の25か所にのみ生育する。さらにこの30年間の開発により、その個体数は以前の1%にまで減少しているといわれている。

2. 照葉樹林と二次林（雑木林）

元来、日本はアジア東部の温帯から亜寒帯に移行する位置にあり、植生区分では常緑広葉樹と、落葉広葉樹で占められている。福大がある七隈一帯は油山の山麓に位置し、本来の自然植生は照葉樹林である。これらの自然環境は私たち人間の生活が関わることで改変され、二次林（雑木林）と呼ばれる植生に変化した。これら二次林を自然林に戻すためには100年を1サイクルとして考えていかなければならない。

3. 緑のつながり

緑の効用としては、その景観の良さ、街路樹や並木が与える木陰、鳥や昆虫の生活の場、やすらぎの提供、落葉等による土壤形成、そして雨水等の保水能力が挙げられる。

例えば、福岡市の中心、赤坂にある通称「けやき通り」は植樹してから50年が経つ

ており、その並木の作る木陰や景観によって、多くの市民に和みの空間を提供している。明治神宮のクスノキ、仙台市青葉通りの楠並木、神宮外苑のイチョウ並木も同様の効果が得られている。

また、山地から平地部に至る緑のネットワークが健全であると、山地から山麓、平地へと鳥類、昆虫類、ほ乳類などの移動が繰り返され、これが緑のつながりとなる。かつては油山から七隈ー茶山ー祖原・紅葉山、七隈ー堤ー長尾ー平尾ー警固台地ー城跡ー荒津山（西公園）と連なる二つの丘陵地帯があり、七隈一帯は油山から福岡平野西部一帯に連なる緑のネットワークの要に位置していた。

4. 水辺のつながりを再生

山地の水源や山麓の溜池から平地部の川に至る水辺のネットワークが健全であると、山地から山麓、平地へと魚類、鳥類、両生類、昆虫類などの移動が繰り返される。さらに、水生植物の生育も保全される。これが水辺のつながりである。

その効用としては、美観、保水、治水、そしてやすらぎの効果は当然のことながら、気候緩和能力も有しております、街中に比べ $0.5\sim2.5^{\circ}\text{C}$ ぐらいの気温差があるといわれている。福岡市内でも天神と大濠公園において同様の効果が認められている。

5. ヒートアイランド化を緩和する緑と風の道を創ろう

福岡大学は予想以上にヒートアイランド化していると思われる。その理由として学内の建物の向きがまちまちであり、風の通り道を遮っていることが考えられる。また、その割には緑が少なく、以前は自然林を含む緑が多く点在し、建物もそんなに密集していないため窓を開けると自然の風が吹き込んでいた。

そこで、福岡大学でも風の道を創る緑陰と水辺を整備することが温暖化を緩和する方法として有効であると思われる。福岡都市圏では夏には背振・油山方向と博多湾・玄界灘方向を結ぶ自然の風が吹くことが知られている。そこで学内に南北方向の通路を設置し、その両側に常緑広葉樹（クスノキなど）や落葉広葉樹（イチョウなど）を植樹して大木に育てその途中に雨水貯留の仕組みを利用した池や小川を配置する。これにより、油山の緑で緩和された自然の風が学内を南北に通り抜け、学園内に涼風を運んでくれる。学内に数本の南北の並木道と水辺を創り、東西方向に当たるところはできるだけ緑の固まりとなる林を創り緑陰広場とすることで、緑による温暖化緩和を図ることができる。

学内自然散策：

今回は、学内の並木道、緑の広場、そして水辺を散策した。まず、正門を入ってすぐの楠並木（有信並木）を見学した。ここでは、参加者に日向と日陰の温度差を温度計で計測してもらい、並木道の与える効用を数値として確認してもらった。タイル舗装された地面からの照り返しで、最大 2°C 以上の温度差が確認できた。次に文系センター前の広場でイチョウの生育状況を観察した。本来ならばもう少し大きく育っているはずだが、建築物によって発生するビル風の影響で生育が遅れているように感じられた。また、文系センター前の人工水辺は景観的な効果は感じられるものの、気候緩和の点ではありません機能していないように感じられた。

その後、烏帽子池に生育している「ツクシオオガヤツリ」の観察を行った。普段、何も気にせずに歩いている水辺に絶滅危惧種に指定されるような植物が生育していることを知った。生育面積はかなり大きかったが、その端に「シュロガヤツリ」と呼ば

れる外来種の植物が確認された。これら外来種は繁殖能力が高いものが多いため、いずれ「ツクシオオガヤツリ」の生育にも影響を与えることが懸念される。

総括：

第三回目の今回は、学内の水辺と緑、さらに記念樹に関する講義、散策を行った。散策後に、これまで三回分の情報から今後の散策マップづくりのコンセプトについて各班で話し合ってもらった。A班は樹木だけでなく草木類も含めた散策マップを作ることにした。またB班は、現在の学内植樹の問題点から、10年後の改善された学内マップを作る。そしてC班は、学内の樹木の解説や立地条件などをクイズ形式でマッピングする方式をとる。

手探りの中始まった「作ろう花と緑とこころのキャンパス」も3回目を終え、これまで参加者の中で漠然としていた「自然散策マップ」への道筋が少し明らかになったことは大きな収穫であった。今後はこれをどのようにして形作っていくかを参加者全員で奮闘していきたい。

